

手塚治虫作品集『風之進がんばる』

はじめに

この作品は、時代劇漫画の初期の作品の一つと言えよう。手塚は幕末時代に興味関心を置いてこの題材を漫画として仕上げたのか？この作品の題名はなぜ、『風之進がんばる』なのか？その疑問にまずぶつかる。

一人の少年剣士を主人公に、日本という国を託す。海外文化交流大使のような役割を彼に与えていく。その主人公の名前を「風之進」という。時代背景は、江戸時代の末、徳川將軍家茂の時代に設定する。朝廷は幕府將軍職にある徳川家茂に対し、異国の日本居留地を認めさせない発令を行うのである。

幕末時代に実在した人物名が飛び交う。新撰組の芹沢鴨と近藤勇、坂本龍馬。長州の伊藤宿祐博文いとうしゆくけいぶんと思いきや架空設定人物大宮鉄斎おのみやてつさい。鉄斎は、主人公吹雪風之進ふぶきかぜのしんの学問の師匠なのである。

時代背景とその展開

この作品から学ぶべきところはどうか見出すのだが、まず急雲動乱を告げるかのように異国船「黒船」が日本にそれも太平洋を超えて將軍在居の千代田城がある江戸湾のつい鼻端である横須賀にやってきたこと、このとき江戸の町は、朝廷（＝天皇、公家衆）の京都では、さらには諸国薩摩・長州・土佐の各藩の状況は、こうした時代に於ける人物設定を見ておく格好な資料とも言えよう。

「私塾」での講義図会



ここで私塾の鳥瞰図をもって眺めてみると、鉄齋が講義する文言は漢籍『孝經』の一言であり、
●「身体髪膚これ父母にうくるは孝の始めなり」と記載するのだが、実際は「身体髪膚」の表記が正しい。次にその文言の箇所を示しておこう。

【原文】身體髮膚、受之父母、不敢毀傷、孝之始也。【読み下し文】「身體髮膚、これを父母に受く。敢えて毀傷せざるは、孝の始めなり。身を立て道を行ひ、名を後世に揚げ、以て父母を顕はすは、孝の終りなり。それ孝は親に事ふるに始まり、君に事（つか）ふるに中し、身を立つるに終る。」（『孝經』開宗明誼章第一）

わが身体は両手・両足から毛髪・皮膚の末々に至るまで、すべて父母から頂戴したも



海外文化交流「竹」と「トーマス・エジソン」

からだ。「男女席を同じうせぜ」という教育の現場を現代の自由度のある大学教育に見立てて描き出しているのだ。ある意味この一人の女人同席が手塚の遊び心や知れない。

のである。それを大切に守っていわれもなくいたみ傷つけないようにする。それが孝行の始めなのだ。立派な人物になり、正しい道を実践し、名を後の世までも高く掲げて、それで「あれは誰の子よ」と「父母の名を世に広くかがやかせる。それが孝行の終わりなのだ。いったい、孝行ということは、家において親に事えることが始まりで、家を出て君に事えるのがその中間で、「孝と忠とを全うして」立派な人間になるのが終わりなのだ。

◆人の身体はすべて父母から恵まれたものであるから、傷つけないようにするのが孝行の始めである。『大辞泉』

といった内容になる。この『孝經』の言句を引用する作者手塚治虫の知的教養性をまづ見抜かねば成るまい。手塚は、典拠資料を諳んじていたに違いない。その証拠に、「身体髪膚」の語表記を「身体髪腑」と同音異義語で表現していることから、検証確認がなされず、ここに引用されたことに尽きよう。こうしたセリフ部分は、手塚が鉛筆で手書きしたものを活字に変換する作業が編集部側に託されており、そこで、校閲も当然行われて然りであるが、この校閲作業にも手抜きがあったと見て取るのである。

次に、受講生の数、受講生の顔ぶれを見ておこう。老若男女が描かれているがその多くは、武家の人たちである。具体的には白髪ハゲの御仁、坊主頭、若武者、鼻の長い女人といった人たちでなのである。ここで、私塾の機構を考察しておきたい。こうした武士社会という知を鍛えるなかでの自由度がどのくらいあったかを手塚は知っていないからだ。私学とはいえ、男女同席する現代の大学機構とは様相をことにしている

「電気の光り」電気のちからでもえるうんとあかるい
 ともしび」の発明に欠かせない「明るくて長時間もちこ
 たえるすばらしいしんのもと（30コマ）がきつと世界のどこかにあ
 るはずだ」
 この「しんのもと」となる材料の「たけ【竹】」につ
 いて国語辞書は何も解いていない。少しく調べてみる必
 要があるう。



● 「長ちようしゆう州しゆうの伊藤宿祐博文いとうしゆうすけひろぶみという男をたずねていけ、風之進かぜのしんが「がんばれ」(48コマ)という内容の手紙であり、ここでは「がんばる」という状態の語形ではなく、「がんばれ」といった志向勧誘形の表現で示されている。「風之進かぜのしんがんばれ」(49コマ)である。

作品題名とは

『風之進かぜのしんがんばる』という人名「風之進かぜのしん」+動詞「がんばる」、この作品名となるのが鉄齋先生からの一通の書状であった。

1, 宮司が祝詞をあげ、



※ ● 「日本にふみこんだ外国人をおいだし外国船をコテンコテンにやるべし」〔5コマ〕。

この勅命の文言に「コテンコテンに」という口頭語をもちいるとは……、手塚さんらしい烏帽子・袴を着て高らか読み上げる公家の人らしさより、その儀式張った所作を砕けておどけて見せるには打って付けの表現となっているのである。

「コテンコテンに」という表現に注目しておこう。

小学館『日本国語大辞典』第二版に、
こてん・こてん〔副〕(多く「に」を伴って用いる) 徹底的にやつつけられたり、またはやつつけたりするさまを表わす語。完膚なきさま。さんざん。こてんばん。*随筆寄席第二集(一九五四)〈辰野・林・徳川〉六「あの頃の日本人てのはとても威張ってましたな。ところが今度は敗戦でこてんこてん」【発音】(標ア)「〇」(京ア)(〇)と一九五四年の『随筆寄席』第二集(辰野・林・徳川)巻第六を引用する。三省堂『新明解国語辞典』第五版に、
こてん・こてん(〇)〔副〕「に(口頭)」徹底的に痛めつけ(られ)る様子。こてんばん。「に負ける」
こてんばん(〇)〔口頭〕徹底的に痛めつけ(られ)ることを表わす。「にやつつ

けられた」

と記載する。

2, 父の叱責語「ばっかもん！」

通常、「ばかもん」という語表現は、罵倒語というジャンルに位置する語である。

手塚はこの一コマを横長いっぱいに描き出す。父のこの一言で、風之進は吹っ飛ばされる。この一言の文字に注目しておこう。横書き右から左へと読む文字列になっているからである。このような横書き右読み文字は、現代の生活言語の一つ景観文字でみるとき、店の看板文字として用いられて気づかされるからだ。では、なぜこのように右から左へ読む文字を書くのだろうか？

その事由を考察検証願いたい。



